

地域再生デザイン研究

研究代表者 古谷 誠章
(創造理工学部 建築学科 教授)

1. 研究課題

近年、日本の社会では、産業構造の変化、少子高齢化の進展、人口移動による地域社会の高齢化等の社会経済情勢の変化に従う地域社会構造の変化が見られる。2009 年、本研究室で行った都市再生プロジェクト推進調査の対象である島根県、雲南市は、人口減少により 6 町村の合併により誕生した市である。雲南市、特に市の周辺部となる地域では、地域社会構造の変化により官庁舎や公立学校舎など遊休公有施設が多く生じている。また市内全域で、公有施設の利用率の低下も問題になっている。このような住民の生活から分離していく地域環境の変化は地域社会の沈滞や住民の居住環境の悪化につながる。また、地域社会構造変化と共に計画される新たな施設は既存の施設との関係を持たないまま建設され、既存施設が立地する地域の孤立、機能の重複による資源浪費による環境問題も考えられる。

これらについては旧町村界を超えた広域的な地域づくりの推進、住民の生活構築の観点から当初の公有施設の目的を見直しながら地域住民のニーズを踏まえた効果的な用途転換及び活用する観点からとらえた具体的設計指針の改革が不可欠となっている。

本研究では、今後のこの問題に意欲的に取り組もうとする地方都市からの委託により、具体的な実践を伴いながら、社会経済情勢の変化と共に地域がもっている価値を見直しながら住民の生活が続けることが可能な地域再生デザイン手法の模索と提案を行う。

2. 主な研究成果

- 2-1. 新潟県上越市月影小学校 / 千葉県鋸南町 保田小学校における廃校リノベーションの研究提案
- 2-2. 島根県雲南市 中山間地域での地域と大学生等による交流ゾーン形成事業
- 2-3. 金網を使った身体スケールの空間デザインの研究
- 2-4. 香川県小豆郡 空き家活用モデル事業
- 2-5. 奈良県 吉野材(スギ・ヒノキ)を活かした木質空間デザインの提案
- 2-6. 岐阜県美濃加茂市 旧伊深村役場庁舎を核とした地域づくり業務
- 2-7. 田野畑村 思惟エリア一体整備構想の策定

2-1. 新潟県上越市月影小学校/千葉県鋸南町保田小学校における廃校リノベーションの研究提案

月影プロジェクトは2018年度で14年目を迎えた。地域再生のために「宿泊体験交流施設/月影の郷」における継続的な関わりと周辺地域・学生を巻き込んだ活動を目指した。

特に、来年度開校15周年を迎えるにあたり、現在、今後どのように地域との関係を築いていくかが課題となった。

鋸南プロジェクトは2018年度で6年目を迎えた。廃校になった旧保田小学校は改修され、2015年12月に、「都市交流施設・道の駅保田小学校」として開業した。2018年度は鋸南町と域学連携を締結し、官学一体となって鋸南町の有休施設の利活用の方策と将来的な街の方向性について議論、調査、提案を行った。

2-1-1. 月影プロジェクト

(1) 竹を使ったインスタレーション提案

月影の郷周辺に自生する竹を使った構造物を作成し、月影の郷のサインとする計画。2018年8月の出張では、実際に細竹を利用しスタードームを作成した。2019年2月の出張では、来年度使用する竹を伐採した。



fig.1 細竹を利用したスタードーム



fig.2 伐採した竹

(2) 「かまくら交流フェスタ」への参加/「さんばいし投げ」の実施

2019年2月には月影の郷で開催される地域の祭り「かまくら交流フェスタ」に参加し、雪を使ったドームの製作などを行った。また翌日には、月影の郷で初の試みとなる「さんばいし(米俵のフタ)投げ」が開催された。新たな地域イベントとして定着することを願っている。



(fig.3) 「かまくら交流フェスタ」の様子



(fig.4) 「さんばいし投げ」の様子

2-1-2. 鋸南プロジェクト

(1) 域学連携プロジェクト

・今年度は鋸南町と域学連携として、①元名採石場 ②鋸南幼稚園 ③保田小駐車場 ④佐久間小学校 ⑤佐久間ダム湖の5つの拠点において利活用提案及び調査を行った。また調査、提案の報告の場として活動報告会を開催し、地域住民への活動報告、意見交換を行った。



(fig.1) 活動報告会の様子



(fig.2) 作成したボード

(2) 佐久間ダム湖大型バス売店改修計画

・佐久間ダム湖ファンクラブからの依頼を受け、セルフビルドによる大型バス売店の改修を行った。設計事務所、地域工務店の協力を得て、2018年12月に無事竣工を迎えた。この売店を拠点に佐久間ダム湖に新たな賑わいの景色を生み出せることを期待している。



(fig.3) 設計段階の様子



(fig.4) 施工段階の様子



(fig.5) 竣工式の様子

鋸南町は今年度関わった拠点をいかに結び、まち全体に回遊性のある流れを生み出すかが今後の課題だろう。今後はより過疎化の進む上越市と、移住者が多く首都圏から近い鋸南町それぞれのまちづくりに対し長い年月を見据えた建築的協力や研究のありかたを検討していく予定である。将来的には2地域に学生を媒介としてなんらかの繋がりが生まれることも視野に入りたい。

2-2. 島根県雲南市 中山間地域での地域と大学生等による交流ゾーン形成事業

島根県雲南市と早稲田大学古谷誠章研究室の連携、平成30年度遊休施設を活用した交流促進ゾーンの形成を目的とし、雲南市の様々な場所で遊休施設の調査・地元学生、住民とのワークショップ・提案を行う。昨年度に引き続き木次町でのさくら祭りにおける空間形成の提案を行った。高校生と共に布をさくら色に染めるWSを行い、空き家を活用した”さくらカフェ”を開き、さくら色の布を用いて空間設計を行った。また、吉田町の商工会館を中心に周辺の空き家や地域資源を調査、それをもとにたたらフォーラムに際しての、吉田商工会館での刃物の展示計画を行った。さらに吉田町民谷では、旧民谷分校の改築案の基本構想部分における提案を行った。その他、他地域においても、祭りやワークショップなどに参加することで、中山間地域での交流を図る。

2-2-1. さくら祭り 2018

2018 年のさくらまつりを盛り上げるための製作を行った。また、今までの活動で作成に取り組んだ建具を活用するなど蓄積を活用した取り組みも行った。昨年度の提案でゲート提案を行うことになっていたが、雨天のため、実行することができなかった。



fig. 1



fig. 2



fig. 3

2-2-2. 吉田町吉田、たたらフォーラム展示空間の提案及び、製作

吉田町吉田の商店街で行われるタタラに関する共催イベントに際して、展示空間のデザイン提案を行った。まず初めに、吉田の商店街が持つ魅力やリソースを活かした、商店街全体を使ったイベント展示空間の可能性を探った。



fig.4



fig.5



fig.6

2-2-3. 旧民谷分校改築計画 基本計画の提案

新たな民谷交流センターとして新築での計画を行うこととなった。

それにあたり、如何に現状の建ち姿を残しながら、新たな空間を手にした民谷交流センターを計画できるのかを模索しながら提案を行った。



fig. 7



fig. 8

2-2-4. その他活動

大東町、黒崎さんと共に賑わいの拠点づくり
 入間花田植え・夏祭り 神楽祭り

2-3. 金網を使った身体スケールの空間デザインの研究

現在、金網の多くは「商品」ではなく、「資材」として出回っているのが現状である。7割が土木工事用資材、残りの1~2割が建築用資材として。「資材」としての金網には、発注時の製作寸法の自由度や工場での高い生産性などのポテンシャルが見込まれている。一方、専門性のない一般利用者にとってその優位性は自分たちの生活とは遠い存在となっており、金網製品の認知度は低いと言わざるを得ない。今回「資材」ではなく「商品」としての金網の使い方を課題とした背景には、大量販売が可能であり、なおかつ将来の販路拡大が見込める「商品」にこそ、今までとは異なる新たな金網の価値があるという製作者の強い意志が込められている。技術者たちが積み重ねてきた厚い歴史の中で凝り固まってしまった従来のマーケットを変えるような提案を期待する。

2-3-1. コンペティションを通した提案

金網を使った身体スケールの空間デザインの研究において、製作するアイデアを選定するため、『金網と異素材の組合せ：それぞれの特性を活かしたデザイン提案』という課題のもと、産学コンペティションを開催した。

課題内容は、金網（菱形金網・溶接金網・金網格子の3種類の中から選ぶ）と異素材（木材、布、ロープ、紐など…）を組み合わせることで、それぞれの良さを引き出す、またはそれぞれに欠けている部分を補い合うことのできるようなデザインの提案をしてください。金網と各自が選んだ異素材をどのように組み合わせるのか、何をつくるのかは自由ですが、最終的には実物を試作することを念頭において提案してください。また、提案するものは、主に室内で使われるもの、またはインテリア空間のためのものであることとします。

各学生により、合計11組（うち個人8名、グループ組）の発表が行われた。その中より「金網で遊ぶ」が選定され、今後の提案の基礎となった。

1 M0 小日向孝夫 floating board 	5 M1 梅原令 なみうつ長椅子 	9 M1 青木日向子&M1 菅原功太 Polyvalent Chair 
2 M1 牛餅 透明なソファ 	6 M2 和久正義&M1 齊藤実紀 金網で遊ぼう 	10 M1 中蔵まりな&M1 原田都木子 percolation 
3 M2 吉原瑞那 Diffusion 	7 M0 石橋梨沙 with light 	11 M1 荒野楓飛 Shelf Curtain 
4 M0 嵐陽向 金網吊り階段 	8 M1 包聖陽 Vertical yard 	

2-3-2. 産学コンペティションにおける学生の提案

「素材と編み方で生まれる多様な金網インテリア」を展示し、同時に作品説明パネル（594mm四方）を3枚、リーフレット（A4両面印刷）、展示ブース用ロゴを作成し、小岩金網株式会社説明パネル（594mm四方）の6枚と併せて展示した。

「素材と編み方で生まれる多様」は、エクステリアに多用される硬いイメージを持つ金網に、柔らかい素材の革紐やプラスチックチューブなどを編み込むことで、立体的かつ自由に組み立てられる家具やスツールを提案・製作した。（詳しくは、後述の説明パネルを参照。）

説明パネルは、1枚目に産学コンペティションの様子と各案の説明、2枚目に学生と小岩金網株式会社による共同研究の進め方の説明、3枚目に「素材と編み方で生まれる多様な金網インテリア」の説明を掲載するという構成にした。

リーフレットは、「素材と編み方で生まれる多様な金網インテリア」の概要を説明する内容とし、IFFT / Interior Lifestyle Livingの会期中に、学生より来訪者に配った。

展示ブース用ロゴは、展示の雰囲気に合わせてと共に、従来の物より一目で金網の会社だと分かるようなデザインとした。



(リーフレット 左：表、右：裏)



(展示ブース用ロゴ)

2-4. 香川県小豆郡 空き家活用モデル事業

高齢化、空き家の増加が進む一方で移住者の転入が見られる香川県小豆郡小豆島町堀越地区において、堀越地区が今後どのような地区になっていくべきかを住民と検討し、現在全国的な問題となっている空き家活用の手法やデザイン提案を行うことを目的としている。

2-4-1. 竹のシシ垣解体への取り組み

イノシシによる農作物被害に困っているという問題解決とともに、堀越地区の美しい風景を訪問者に伝え、移住者促進を促すことを目的として瀬戸内国際芸術祭2016・秋に製作した「竹のシシ垣」を、堀越住民・小豆島町との話し合いの結果、以下のような理由から、今年度中に撤去することが最善であるという考えに至った。

- ・小豆島町の取り決めにより、瀬戸芸2016の作品は、恒久作品以外は原則撤去となったこと
- ・新町長の財政見直しによる古谷研への委託研究の終了（継続的に学生がメンテナンスの主体となることができない）
- ・今後のメンテナンスの難しさや、老朽化等

ただ、古谷研としてはシシ垣をただ撤去するのではなく、そのプロセスも堀越を良くしていく1ステップとしてデザインしたいと考え、竹のシシ垣の解体→お別れセレモニーの実施→地区行事であるとんどにて燃やすという過程を経て、シシ垣を撤去する運びとなった。



fig.1 住民、島宿真里、町役場との意見交換

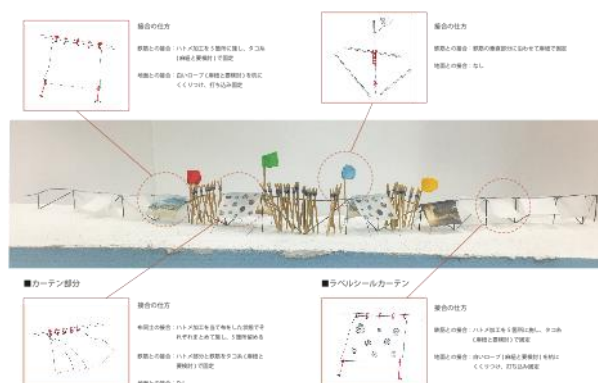


fig.2 竹のシシ垣活用提案



fig.3 お別れセレモニーチラシ

2-4-2. これまでの活動の継承

古谷研究室では、平成26年度から堀越地区の地区行事への参加や提案を継続して行ってきた。本年度は、解体した竹のシシ垣をとんどで燃やすことにより、これまでの取り組みの総括とした。また、これまでの成果や、祭りの概要や来歴、発見した魅力などをまとめ、これから堀越地区に入ってくる島宿真里へと伝えるためと、地域住民と研究室との軌跡のため、2種類のフォトブックを作成した。このように、活動の蓄積やそこからわかったことをアーカイブ化していくことで、将来的な移住者や観光客へ、堀越の文化を発信・継承するツールとなることを展望とする。



fig.4 竹のシシ垣解体の様子



fig.5 竹のシシ垣解体の様子



fig.6 解体後、お別れセレモニーに向けて活用



fig.7 お別れセレモニー集合写真



fig.8 観光用フォトブック



fig.9 地域住民用フォトブック

2-5. 奈良県 吉野材(スギ・ヒノキ)を活かした木質空間デザインの提案

吉野材の魅力を最大限に活かした新しいブランドづくりを推進し、県の林業・木材産業の振興を図ることを目的とし、吉野材の魅力を最大限に引き出す木質空間としての新しい用途の調査及びデザイン開発を行う。昨年度に引き続き首都圏に重点を置き、吉野材（スギ・ヒノキ）の空間デザインの提案を行う。奈良県内での木材活用として吉野以外の地域の林業や奈良県産材の視察を行うことで、吉野材だけではなく奈良県全体で抱えている林業・木材の知見を得る。

2-5-1. 丸の内・KITTE 奈良の木 PR イベント

丸の内・KITTE で行われた『奈良の木∞すこやかな暮らし』において、1 階アトリウムでのデザイン発表の機会を頂いたことから、「丸の内に訪れる方の暮らしやオフィス空間に木を取り入れてもらうためにどのように発信するか」を学生間で議論し、工務店や家具屋など様々な方にご協力いただき、木質空間の提案・製作を行った。105 角や 120 角の構造材で構成されたフレームを基本として、家具や小物の展示・販売スペースやワークショップやレクチャーが行われるスペースなどのそれぞれの空間を緩やかに繋ぐことで、会場内を巡りながら奈良県の吉野材、林業の素晴らしさを都会の日常の暮らしの中で体感できる提案となった。



fig.1 制作物



fig.2会場の様子

2-5-2. 上北山村での天然林活用提案

上北山村の天然林や林業、木材を視察し、吉野地方以外の奈良県産材についての知見を深めることで、吉野材の位置づけを再認識ができた。これにより吉野材、ひいては奈良県産材を活用したデザイン提案の可能性を研究する足掛かりとなった。

昨年度の意見交換会での話し合いを元にして、地域住民の方々の案内による天然林や遊歩道の現地視察を行い、上北山村の魅力や課題を再確認することができた。また、今後は、上北山村の広葉樹や広葉樹林の魅力を消費者に知ってもらうための仕組みづくりが必要になってくると考え、上北山村の広葉樹を活用した家具によるブランディングの提案を行った。



fig3. 視察の様子



fig4. 打ち合わせの様子

2-6. 岐阜県美濃加茂市 旧伊深村役場庁舎を核とした地域づくり業務

2017 年度に古谷誠章研究室で再生活用デザインを行なった旧伊深村役場庁舎を拠点として、人口減少が進む伊深地区の地域活性化につながる事業の仕組みづくり・デザインの提案を行う。

2-6-1. 地域活性化の拠点施設に必要な仕組みの策定

旧伊深村役場庁舎が、今後、伊深地域を含めた市北部地域の中心的な拠点として、多様な交流を生み出し、地域コミュニティを深める施設となるために必要な役割や、地域住民が日常的に集い活性化につながるような仕組みをデザインし、策定を行なった。オープニングイベントでは、様々な人にイベントを通して日常的に利用できるカフェとしてPRを行なった。また、バス停留所のデザインを旧伊深村役場庁舎と関係を持たせ、日常的な利用がしやすいデザインを行なった。



Fig. 1 オープニングパーティの様子 セレモニー



Fig. 2 オープニングパーティの様子 改修のプレゼンテーション



Fig. 3 オープニングパーティの様子 伊深日記



Fig. 4 オープニングパーティの様子 古写真の収集



Fig. 5 オープニングパーティの様子 記念撮影



Fig. 6 バス停留所のデザイン提案

2-6-2. 住民を交えた地域活性化の実践

古写真収集を通して伊深の歴史や文化について深め、上映会を行うことで伊深の魅力を再認識してもらう企画を行なった。また、伊深めぐりでは、自然をテーマに散策路を計画し、地域住民や外部の人が伊深の良さを体験できる企画も行なった。



Fig. 7 古写真の上映会の様子

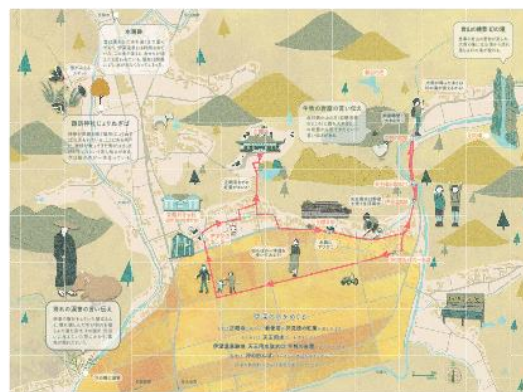


Fig. 8 伊深めぐりのマップ

2-6-3. 施設運営に関するデザイン

施設の改修に関して、新たな旧伊深村役場庁舎を利用者にわかりやすく使ってもらうようにパンフレットを製作した。また、バス停留所のデザインを旧村役場を模したものとし、関係性を大きく持たせるものとした。



Fig. 9 旧伊深村役場庁舎 改修計画のパンフレット



Fig. 10 バス停留所の最終デザイン提

2-6-4. まちづくり協議会定例会や旧伊深村役場庁舎の運営者との打ち合わせ

本市担当者と協議に加え、まちづくり協議会定例会や旧伊深村役場庁舎の運営者との打ち合わせを合同で行ない、提案資料作成などの運営補助（連絡調整、資料作成、記録作成等）を行なった。



Fig. 11 運営者との打ち合わせの様子



Fig. 12 まちづくり協議会定例会の様子

(古谷誠章研究室 撮影)

2-7. 田野畑村 思惟エリア一体整備構想の策定

加速度的に進む人口減少や高齢化社会や財政課題について、村民、議会、行政で協働し課題解決に向け、まちづくり計画を策定する。その中で、道の駅たのはた移転に係る既存施設を含めた【思惟エリア】一体整備構想を策定する。内容：移転に伴う道の駅たのはた建設計画を、重要な地域振興拠点と位置付け、将来にわたる持続可能なむらづくりの一環として、住民委員会を経て周辺に点在する早稲田大学の「思惟の森」や「寒立荘」、村の既存施設「生きがいの館」「思惟大橋コミュニティ公園」や歴史街道「辞職坂」などを連携した活用と併せ、住民に親しまれる道の駅を含めた思惟エリアとして構想を策定する。

2-7-1. 生きがいの館改修計画

旧村長工藤邸である生きがいの館は、村民や高齢者の健康増進と教養の向上のための体験交流施設として活用されていた。本改修では、以前からある村民のための体験交流施設としての機能を建物一階に、教育や文化を目的とした旅行者のための宿泊機能を新たに建物二階に設けることで、「高齢者の健康増進と教養の向上を図る体験交流機能」、「農山漁村の生業や文化を旅行者等が体験できる場や滞在機能」「古民家の魅力、再生過程の見せ方」「隣接する道の駅やサンマッシュ田野畑との連携」とい具体的には、村民や高齢者の体験交流施設として、建物東側に土間と食卓、共有キッチン进行計画した。ここでは、高齢者がキッチンに立ち自分の食事だけでなく集まった人と会話しながら料理を振舞うことができる。建物中心部は既存の姿を残しながら宿泊所とし、二階の洋室は宿泊者のためのラウンジとしてくつろげる空間とする。外観は保存しながらも、雨戸やサッシは付け替えることで冬の田野畑村の寒さに対応し、建具を再利用することで当時の雰囲気を残していく。



fig. 1 旧村長邸



fig. 2 生きがいの館の位置付け



fig. 3 模型写真



fig. 4 模型写真

2-7-2. 道の駅たのはた建設計画

道の駅建設予定地は「思惟の森」、早稲田大学所有の曲がり屋「寒立荘」、旧村長邸「生きがいの館」、思惟大橋コミュニティ公園など様々な周辺施設と隣接する「思惟の森エリア」にある。これら周辺施設との連携を図りながら、道の駅が従来の産直市場や休憩施設としての機能だけでなく、田野畑村の新しい玄関口となり来訪者が田野畑村を知るきっかけとなり、また若者からこうれいしやまで幅広い年代の村民が利活用することで「思惟の森エリア」一体を巻き込み、「思惟の森構想」や「教育立村構想」を二なる新たな場所となることを目指し計画を行った。そのために、村民とのワークショップに参加し、道の駅に必要な機能や形態をまとめた。



fig.5 ワークショップの様子



fig.6 ワークショップのまとめ

3. 共同研究者

斎藤 信吾（創造理工学部・講師）
山田 浩史（創造理工学部・助手）
王 薪鵬（創造理工学部・助手）
宮嶋 春風（創造理工学部・助手）
根本 友樹（創造理工学部・嘱託研究員）

4. 研究業績

特になし

5. 研究活動の課題と展望

5-1. 新潟県上越市 月影小学校 / 千葉県鋸南町 保田小学校における廃校リノベーションの研究提案

鋸南町は今年度関わった拠点をいかに結び、まち全体に回遊性のある流れを生み出すかが今後の課題だろう。今後はより過疎化の進む上越市と、移住者が多く首都圏から近い鋸南町それぞれのまちづくりに対し長い年月を見据えた建築的協力や研究のありかたを検討していく予定である。将来的には2地域に学生を媒介としてなんらかの繋がりが生まれることも視野に入りたい。

5-2. 島根県雲南市 中山間地域での地域と大学生等による交流ゾーン形成事業

都市再生モデル調査以来、古谷研が雲南市に携わって 11 年目を迎えた。今年度は吉田町、木次町だけではなく、大東町、加茂とのかかわりが生まれ、雲南市の活動範囲を広げることができたのではないかと考えている。さらに、たたらフォーラムでの展示、バームクーヘン工場の店舗部分など、建築スケールには到達していないかもしれないが、街の人に形として古谷研の活動を見てもらうことができた良い機会となったと考えている。加えて、竣工は3年後ということだが、新民谷交流センター計画案であったり、来年度活発に調査が進むかもしれない木次商店街における空き家の改修計画など、建築のスケールで雲南 PJ メンバーが雲南市に深くかかわっていく足掛かりになる年度になったのではないだろうか。

合併の際に生まれた遊休施設から都市の問題を考えるフェーズから、それぞれの地区の状況を 10 年分のデータを参考に整理し、より踏み込んだ地域活動ができるフェーズへと移行したと感じている。

今後は、新民谷交流センターや木次商店街における空き家の改修計画など、大きなプロジェクトに学生が関わることができると言える。そこで、今までの 10 年間の活動から見えてきた地域との関係や情報の蓄積をおろそかにせず、それをもとに提案や活動ができるよう尽力していきたい。

5-3. 金網を使った身体スケールの空間デザインの研究

今後の課題としては、大きく二点あげられる。金網は端部の処理にコストがかかるため、異素材で編むことで安価に抑えられるのだが、革紐など高価な材料を使った場合、通常の処理よりコストが嵩む。もう一点は、当初子供にも触ってもらえるように編むという行為を用いたが、端部の処理を致していない場合は、網の切り口が鋭利となることで対象年齢が想定より高くなる恐れがあった。

展望としては、編む素材によって金網が色々な表情を見せるため、従来とは違う雰囲気のインテリアとしての使用を見出すことができた。また、素材との組み合わせの考慮だけでなく、編まれる骨組みとなる金網の網目のピッチを変えることにより、違った編み方をすることができるようになるため、さらなるバリエーションを生むことができる。

5-4. 香川県小豆郡 空き家活用モデル事業

今年度で小豆島町との契約は終了するが、堀越地区が抱えている空き家の現状に対する提案や堀越地区の魅力を伝えるために古谷研究室と地域住民が行ってきた様々な成果物を今後も継承していってもらえるように、これまでのノウハウや思い出をまとめたものを地域住民の方々に献上することを考えている。それを見て、地域住民の方々が小豆島の魅力を掘り起こしていくことを願う。

5-5. 奈良県 吉野材(スギ・ヒノキ)を活かした木質空間デザインの提案

来年度以降も更に吉野材の魅力を活かし、より汎用性や専門性を高めた展示や空間を目指し研究を深めることで、吉野材の魅力や実空間への使用の利点を伝えることができると考える。首都圏等での吉野材展示キットや短期的なイベントブースの導入による普及は今後も販路拡大という意味では有効であるため邁進していきたいが、吉野材でできた空間の導入が可能となる提案として、上北山村での自然林活用した提案が、現実のものとなっていくことで木材を活用した建築デザイン提案の研究が可能となるのではないかと考える。今後も今年度と同様に首都圏に重点をおいた活動と、奈良県内における PR 活動並びに空間提案を同時平行で重ねて行くことで、吉野材を取り巻く環境や吉野材のブランド力の向上、更には林山地の活性化を図り、その利用拡大につなげていきたい。

5-6. 岐阜県美濃加茂市 旧伊深村役場庁舎再生活用基本デザイン策定業務

今年度は、古写真の収集やお月見会、伊深めぐりを通して、伊深の歴史や文化に触れることができた。これら伊深の魅力を対外的にどのように発信していくか、外部からの来訪者を増やす方法を考えていく必要がある。その一つとなるように、バス停留所のセルフビルドを行なっていく、旧伊深村役場庁舎を起点として、伊深に長く滞在してもらえそうな仕組みを検討する必要がある。また旧伊深村役場庁舎の周辺だけでなく、山之上や三和といった美濃加茂市北部も含めた視察を行なった。他地域とのネットワークの構築を含めた提案やまちづくり活動を検討することも必要である。

5-7. 田野畑村 思惟エリア一体整備構想の策定

本年度は、道の駅計画を通して思惟の森エリア内のそれぞれの建築や場所をつなげるための土台をつくるためのワークショップを通して村民のみなさんと意見交換を行ったが、今後は村民が日常的に使い、集まり、運営する場所としてどのように計画を具体化していくかが課題となる。